

「十字架のもとぞ」 **Beneath the Cross of Jesus** は、スコットランドの詩人で敬虔なクリスチャンであったクレフェインにより、彼女が 38 歳という若さでこの世を去る前年の 1868 年に作詩されました。

この讃美歌で、十字架は神の義と愛の出会いと歌われます。イエス・キリストの十字架より、神ご自身の一人子を身代わりの犠牲にしてまでも罪を徹底的に裁く神の正義と、信じる者の罪を全く赦し神の子とする神の愛、すなわち救いが現されたところだからです。その救いが、クレフェインの心のこもった詩とメイカーの優しいメロディーが合わさって讃美歌の中に神聖な空間が生まれ、疲れた魂を安らぎへと誘います。

作詞者エリザベス・セシリア・クレフェイン (Elizabeth Cecilia Clephane、1830-69) は、1830 年にスコットランドで生まれ、1869 年に亡くなりました。父は郡保安官、母はその地の豪族の子孫で、彼女は 3 人娘の末っ子でした。

彼女は短い生涯の大半を虚弱な体で過ごしましたが、町の貧しい人々や病人を助ける力を持っていました。彼女と妹は、貧しい人々のために馬車を売るなど、持てる限りの財産を慈善事業に寄付しました。町の人々は彼女を「太陽の光(サン・ビーム)」と呼んでいました。

また、彼女には生まれつき備わっていた文学的才能があり、幼い時から詩を作りました。その生涯に作詞した讃美歌の数は少なくとも 10 首はあったようです。(讃美歌第Ⅱ編 183 番「九十九の羊は」も彼女の作です。) それらの讃美歌には聖句が頻繁に出て来ることから、彼女がいかによく聖書を読んでいたかが判ります。

この「イエスの十字架のもとぞ」は、作者の死後 3 年後に 1872 年にスコットランド長老派教会により出版された『Family Treasury (家族の宝物庫)』で、彼女の大部分の讃美歌(詩)と共に「Breathings on the Border (境界での呼吸)」という表題で収録されました。その序文で、当時編集者であったエディンバラの W・アーノット牧師が次のように記しています。

ここに収めた詩文は、最近世を去った一人の若いキリスト信徒の経験と、希望と、願いとを表現している。地上の生活の終わりにおいて、信仰の眼でより良き国を明らかに望みつつ書かれたもので、「時間」の砂原が「永遠」の大洋に接するところに印された足跡であるかのように私には思われる。善き羊飼いであったもう主が、荒野を通じて休息に導いたもうた人のこれらの足跡は、神の祝福によって、後続の巡礼者たちに慰めと導きを与えてくれるであろう。

『The Family Treasury (家族の宝物庫)』は、日々親しく読まれることを意図し、様々な著者の寄稿による、子育て、人間関係、個人の行動、そして霊的な内省など、家族生活に関わる幅広いテーマを扱っています。それぞれのテーマは、実践的な指針を提供し、思慮深い議論を促し、キリスト教の信仰に根ざした調和のとれた家庭環境を育むよう、厳選されています。本書の魅力は、信仰と道徳に関する永遠の問いを、日々の経験を通して問いかける力にあり、今でもその初版復刻版が入手可能です。

<https://www.amazon.co.jp/Family-Treasury-William-Arnot/dp/3382141736>

ST. CHRISTOPHER と題された穏やかながらも荘厳な曲は、1881 年にフレデリック・チャールズ・メーカー (Frederick Charles Maker、1844-1927) により、クレフェインの詞に合わせて作曲されました。

メーカーはイングランド南西部のブリストルに生まれ、生涯そこを離れることはありませんでした。最初ブリストル大聖堂の聖歌隊員をしていましたが、後にオルガニストになり、ブリストル市内のいくつかの教会、とりわけレッドランド・パーク組合教会のオルガニストを 28 年間もつとめ、また、クリフトン大学の音楽教師や、ブリストル自由教会の聖歌隊指揮者を長年つとめました。

作曲の面では、讃美歌、アンセム(国教会の礼拝合唱曲)の他に、カンタータ(独唱・合唱・重唱と管弦楽からなる声楽曲)やピアノ曲など多くの作品を残しました。彼の作曲した讃美歌で私たちの『讃美歌集』に入っているものは、この 262 番の他に、「ああ讃むべきかな」(讃 92)、「みそらたかく」(讃 227)、「なやむものよ」(讃 242)、「ガリラヤの湖畔」(讃 317)、「寄せくるこの世の」(讃 362)の 5 曲あります。いずれも半音階的進行(隣り合う各音の音程が半音になっている)と巧みな転調を用いて美しい旋律をなしています。

讃美歌 262 番の日本語訳詩は由木康牧師で、讃美歌 21 にも「十字架のもとに」(300 番)として収録されていますが、歌詞が一部異なります。